

公職研主催 令和 6 年度欧州専門調査報告

- 1 派遣議員 長崎市議会議員 山崎 猛
- 2 研修主要テーマ 脱炭素先進国における戦略的な街づくりを学ぶ
- 3 派遣期間 令和 6 年 11 月 18 日（月）～11 月 23 日（土）
- 4 派遣先 デンマーク（コペンハーゲン）
フィンランド（ヘルシンキ）
- 5 研修の概要 下記のとおり

【訪問都市の概要】

今回の欧州専門調査は、デンマークの首都コペンハーゲンと、フィンランドの首都ヘルシンキを訪れた。環境先進国の多い北欧の中でも、デンマークは再生可能エネルギーが発電量に占める割合が 8 割以上と際立っている。2050 年までにはこれを 100%にするとしている。フィンランドは毎年世界幸福度ランキングで 1 位になるなど、「世界で最も幸せな国」として知られている。質の高い医療や教育の機会が均等に行き渡るなど、福祉国家としても有名である。



【視察日程】

	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	スケジュール	食事
1	2024年 11月18日 (月)	東京(羽田) 東京(羽田)発	18:55 21:55	AY062	羽田空港集合 空路、ヘルシンキ経由、コペンハーゲンへ 【所要時間:13時間5分/時差:日本より-7時間】 <機中泊>	朝:× 昼:× 夜:機内食
2	11月19日 (火)	ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 コペンハーゲン着	4:00 7:10 7:55 14:00 17:00	AY951 専用車	ヘルシンキで乗継後、コペンハーゲンへ 空路、コペンハーゲンへ 【所要時間:1時間45分/時差:ヘルシンキへより-1時間】 コペンハーゲン到着後、市内視察 (コペンハーゲン市庁舎【O】、チボリ公園【O】、 ストロイエ【O】、ニューハウン【O】、等) ミデルグルンデン視察 ホテル到着(予定) <コペンハーゲン泊>	朝:機内 昼:× 夕:×
3	11月20日 (水)	コペンハーゲン発 ヘルシンキ着	午前 8:40 11:15 16:15	専用車 AY952 専用車	空港へ 空路、ヘルシンキへ 【所要時間:1時間35分/時差:コペンハーゲンへより+1時間】 着後、ヘルシンキ市内視察 (ヘルシンキ大聖堂【O】、ウスペンスキー寺院【O】、 テンペリアウキオ教会【O】、ハカニエミマーケット【O】、等) ホテル到着(予定) <ヘルシンキ泊>	朝:○ 昼:× 夕:×
4	11月21日 (木)	ヘルシンキ滞在	午前 午後	専用車	高齢者施設訪問またはレクチャー(調整中) 自由視察 <ヘルシンキ泊>	朝:○ 昼:× 夕:×
5	11月22日 (金)	 ヘルシンキ発	 15:00 17:55	 専用車 AY061	出発まで自由視察 ホテルチェックアウト 12:00 ホテル出発後、空港へ 空路、帰国の途へ 【所要時間:13時間30分/時差:ヘルシンキ+7時間】 <機中泊>	朝:○ 昼:× 夕:機内
6	11月23日 (土)	東京(羽田)着	14:25		通関手続き終了後、解散	昼:機内

【1日目 コペンハーゲン】

ストロイエ、クリスチャンボー城、ニューハウン、コペンハーゲン市庁舎、チボリ公園、コペンヒル、ミデルグルンデン（洋上風力発電）等

コペンハーゲンは北欧最大の都市で、人口は約 76 万人。歴史的な建物と現代的な建築が混在している。前述のとおり環境先進国として有名で、その一翼を担っているのが、都市レベルでの自転車インフラ整備及び脱炭素の取り組みである。

2011 年には、2025 年に世界一の自転車都市を目指して、自転車政策を発表し、10 年間で約 2 億ドル（約 287 億円）を自転車インフラに投資している。また、脱炭素の取り組みについては象徴的な 2 か所の発電所を視察で訪れることができた。世界幸福度ランキングはフィンランドに次いで 2 位である。

研修視察①

●コペンヒル（廃棄物発電所）：コペンハーゲン市の約 3 万世帯に電気を、約 7 万 2000 世帯にセントラルヒーティング（熱源装置でつくった温水がパイプを通じて送り込まれる暖房システム）を供給している。ルーフトップが天然芝・人工芝ミックスのスキー場になっており、頂上付近にはカフェ・バーがあり、テラス席でドリンクも楽しめる。また、建物の側面には 85m のクライミングウォールがあり、ロッククライミングもできる。

・複合的な機能

アマーという工業地帯に、高さ 85m、屋上の緑地が 1 万 m²、全長 450m という巨大施設。

・誕生の背景

2011 年、築 50 年の廃棄物発電プラント「アマー・バック」建て替えのためのコンペが行われ、満場一致で優勝したのは、世界的に活躍するデンマークの建築家、ビャルケ・インゲルス氏が率いる BIG 建築事務所。BIG のアイディアはアマー・バックの屋根にスキー場をつくり、コペンハーゲンに新たなランドマークをつくるというもの。このコペンヒル完成までにかかった年月は 9 年、費用は約 5 億ユーロ。

・廃棄物発電プラント

このプラントでは、年間 44 万 t の廃棄物をクリーンなエネルギーに変換し、地域の 15 万世帯に電力と地域暖房を届けている。地域暖房とは、地域内の建物群に地域冷暖房プラントから、温水・蒸気などを地域導管を通して供給し、暖房・給湯などを行うシステムのこと。

- ・エネルギーへの変換

廃棄物のエネルギーの 90%は高圧蒸気に変換され、2 つのボイラーでつくられる蒸気は摂氏 440 度の高温になる。さらにスチーム・レールと呼ばれる蒸気パイプに集められて、そこから蒸気タービンに送られる。発電量は最大 63MW。ちなみに、100MW は約 3 万 1,000 世帯分の年間消費電力量に相当。

- ・地域への暖房供給タービンが蒸気から圧力と熱を奪っても熱エネルギーはまだ残っており、その残ったエネルギーは地域熱交換器で利用される。熱交換器では、地域暖房用の水が加熱され、地域暖房ネットワークに送られる。水中の熱が消費者によって利用されると、水は戻されて再び加熱されるしくみ。この地域暖房の生産量は最大 247MW。



コペンヒル遠景



コペンヒル屋上

研修視察②

●ミデルグルンデン（洋上風力発電）：コペンハーゲン沖約 3 kmにある風力発電所。この洋上電力発電 20 基の風力タービンが建設されたのが 2000 年であり、2001 年から稼働している。発電用風車の支柱の高さは 64m、回転翼の直径は 76m、全体の高さは 102m で、1 基当りの発電能力は 2MW で、発生した電力は長さ 3.5 km の海底ケーブルを経由して陸上まで送られる。

- ・合計発電量

合計発電量は 40 MW。コペンハーゲンで消費される電力の 3% 以上を供給し、欧州で最大の海上風力発電能力を持つ。（ちなみに日本の風力発電は北海道・東北などに設置されており、全体のエネルギー量の約 0.8 %を発電）

- ・出資

91 年の洋上風力発電所ビンデビーの際に功を奏した「協同組合方式」を大規模な洋上風力発電にも持ち込んだミデルグルンデンは、環境意識

の高まりに加え、売電収益で配当が得られて税制優遇も受けられるという実益も相まって人気となり、8千人以上の出資が集まった。北側10基をコペンハーゲン・エネルギー公社が所有し、南側10基をミデルグルンデン風力発電協同組合が所有している。

・稼働

風速3mから稼働して、25mを超えると徐々に止まり、30mで完全にストップする設計になっており、耐用年数は20年。今現在22年経過しているが問題は無いとのこと。今後は既設を使用しながら、大きな施設に取り換えを予定。また、現在これよりも大きな高さ270m、直径230mの風力発電を建設中で、1基当りの発電能力は15MWで、ミデルグルンデンの7.5倍の発電量となる。工事費は1億7千クローネ（日本円3億7千万円）、工事期間は規模の大小変わらず、制作から設置まで1年。

・日本との比較

日本はデンマークに比べて開発が遅れているが、北海道や九州地方でプロジェクトが進行しており、近年急速に進展している。（2022年度電源構成で風力発電が占める割合は日本約0.9%、デンマーク81.4%）政府の支援で比べると、日本は長期的戦略が示されておらず、デンマークは2050年までに電力を100%再生可能エネルギーに転換することを掲げている。日本の技術は安全及び効率性を重視しているが、デンマークのような大規模な施設や効率的なシステムに至るにはまだまだ課題が多い。

協同組合のヤンス氏（79才）から、風力発電の設置までの経緯について話を伺った。

以下ヤンス氏の話

「海上に風力発電施設を設置すると決まった当初、自然環境団体から激しく抗議を受けた。コウモリやダチョウが羽に当たって死ぬのではないかとなどの抗議に、様々な対策を講じて解決をしてきた。



洋上の風車

（25年間で死んだのは1羽のみ）協同組合にはヤンス氏の他約8千人の市民が出資しており、一般市民からの反対は無かった。」

研修視察考察

前述のとおり、デンマークでの再生可能エネルギーが発電量に占める割合は8割以上と世界的に見ても抜きん出ているが、今回2つの施設を視察させていただき、さすがの環境先進国だと思った。特に複合施設が注目されていて、風力発電とバイオマス発電とを組み合わせたもので、効率的かつ持続可能なエネルギー供給を実現していた。デンマークの国民性として、環境保護や持続可能エネルギーに対する強い意識があり、これにより再生可能エネルギーの利用が進んでいて、国全体でのエネルギー自給率が高まっている。コペンハーゲンも寒冷地だが、人々は自転車移動が主になっていて、健康増進にも役立っているそうである。長崎市では平地も少なく、難しい点も多々あるが、身近なところでのゴミの分別やなるべく公共交通機関を使用しての通勤等、自分たちが今できることを改めて見直していくことから始めていかなければならない。

また、コペンヒルもミデルグルンデンも、住民参加型のコンペや出資により実施されているところが素晴らしいと思う。ちまたでよく言われる「お役所しごと」ではなく、地域や住民にとって本当に必要で有効なものを、当事者を交えて考え、提案し、選び、決定していく。ひとつひとつの事業の芯に当事者目線があると思う。

そして、観光地としても参考にすべき点が多数ある。コペンハーゲンの観光団体は、2019年にニューハウンを主要な観光地のひとつとして宣伝することをやめると決定し、一極集中ではなくよりまんべんなくコペンハーゲンを体験してほしいとの願いから、自転車や公共交通を使ってコペンハーゲン郊外や周辺都市への訪問を促すなど、コペンハーゲンの中心市街地以外の訪問先を観光客に提案している。さらに、主要な観光地でよく見られる、市民が観光客に対し否定的であるという大きな課題もコペンハーゲン市民は、80%以上が旅の目的地としてコペンハーゲンが宣伝されることを支持しており、世界中の人々がコペンハーゲンを選んでいることを誇りに感じているということがわかっている。

共存・共栄・共創を大切にするコペンハーゲンの観光地としての在り方はぜひ参考にしたいところである。

市内視察

●ストロイエ：世界で初めての歩行者天国と言われており、市庁舎前広場からコンゲンス・ニュートー広場までを結ぶショッピングストリートで、カフェやショップなど、多くの店舗が立ち並ぶ。

●クリスチャンボー城：デンマーク王室及び政府の迎賓館として使われているほか、国会議事堂や内閣府、最高裁判所など、デンマークの三権に関する施設が置かれている。ちなみにデンマークの国会議員は 179 名、40%が女性で平均年齢は 46.7 才である。

●ニューハウン：新しい港という意味で、人魚像でも有名。デンマークは古い壁面を残して新しい建物を作るという考えがあり、この地域には 3 つのルールが設けられている。壁面色は変えない、屋号は変えない、船のマストは木製、この 3 つの景観を重視した決まりがカラフルな街並みをつくっている。



ニューハウンのカラフルな景観

●コペンハーゲン市庁舎：1892 年から 1894 年にかけて建設され、ネオ・ゴシック様式で設計されている。特にその時計塔は市のシンボルとなっている。ミッシェル・デ・クラーク設計の尖塔は高さ 105.6m。街の景観を損なわないために、市庁舎の塔より高い建物を建ててはいけないという条例がある。

●チボリ公園：世界的に有名なテーマパークで 1843 年に開園した世界最古の遊園地。日が長い夏は夜 11 時までオープンしていて、11 月中旬から 12 月 23 日まで開催されるクリスマス市では、園内が 1 万個のイルミネーションで彩られて幻想的。

【2 日目 ヘルシンキ①】

ハカニエミマーケットホール、ヘルシンキ大聖堂、ウスペンスキー寺院、テンペリアウキオ教会

ヘルシンキは美しく清潔感にあふれた、バルト海に面した港町である。ヘルシンキ大聖堂が中心部の高台にそびえ立ち、街のシンボルになっている。面積 210 m²、人口 67 万人ほどで日本の首都東京に比べても、広さも人口密度もぐっと少なく、のんびりと穏やかなムードが漂う。

教育の質が高い北欧のイメージどおり、ヘルシンキには 190 の総合中等学校と 41 の高等学校、15 の職業訓練機関があり、41 の高等学校の半数は私立か国立で、残りの半数は自治体運営の公立である。高等教育は 8 の大学と 4 のポリテクニクにより提供されている。フィンランドの教育制度で最も特徴的なことは、6 歳の就業前教育から大学まで一貫して無償なことである。

市内視察

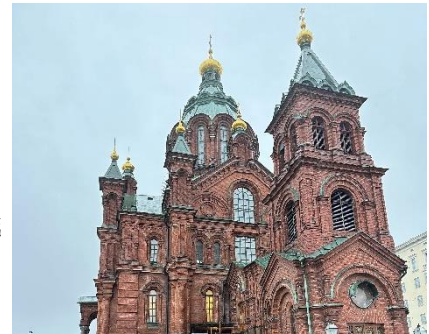
●ハカニエマーケットホール：ヘルシンキにある市場の中でも地元の食材を楽しめる老舗市場。1914年開業と長い歴史をもち、地元の人々からも愛されている。ここでサーモンスープをいただく。



サーモンスープ

●ヘルシンキ大聖堂：優美な白亜の外壁と緑色の5つのドームが今も昔もヘルシンキの街をやさしく見守っており、街のランドマークにもなっている。ドイツ人建築家のカール・ルートヴィヒ・エンゲルにより設計され、1852年に完成した当時はニコライ教会と呼ばれていたが、1959年に現在の名称に改称された。正面の祭壇画の反対側に5,614本のパイプオルガンが設置されている。

●ウスペンスキー寺院：北欧最大規模を誇るフィンランド正教会。ロシア帝国の建築家アルクセイ・ゴルノスターエフの設計により1862年から1868年にかけてカタヤノッカ半島の丘陵地に建立された。聖堂の地下には第2次世界大戦中にソ連軍の空爆からの避難所として地元の消防団が掘削した防空壕が残っている。現在では内部の温度変化が少ないことに注目した電力会社が数百台のサーバーを設置し、その熱を周辺地域の温水暖房に利用している。教会の立つ丘からはヘルシンキの街が一望できる。



ウスペンスキー寺院

●テンペリアウキオ教会：天然の小さな岩山をくりぬいて造られた福音ルーテル派の個性的な教会。内部の壁はそのまま利用され、直径24mの銅板で天井が覆われている。その独特の形状から音響効果の良さに定評があり、コンサート等にも使用されていて、素晴らしい空間であった。

【3日目 ヘルシンキ②】

社会福祉についてのレクチャー、カッペリ、デザイン博物館、聖ヨハネス教会、カンピ礼拝堂

研修レクチャー

●フィンランド社会福祉専門家の話：フィンランドの社会福祉について、現地で活躍している社会福祉の専門家に話を伺った。

《出産育児について》

・フィンランドの出生率も 1.26 と日本と同じく低下している。20 代女性の出生数が激減していることが主な低下の原因で、高齢出産化しているところも日本と同じである。家族支援政策は子を持つ家族には効果があったかもしれないが、本来の目的である出生率の上昇には結びついていない。

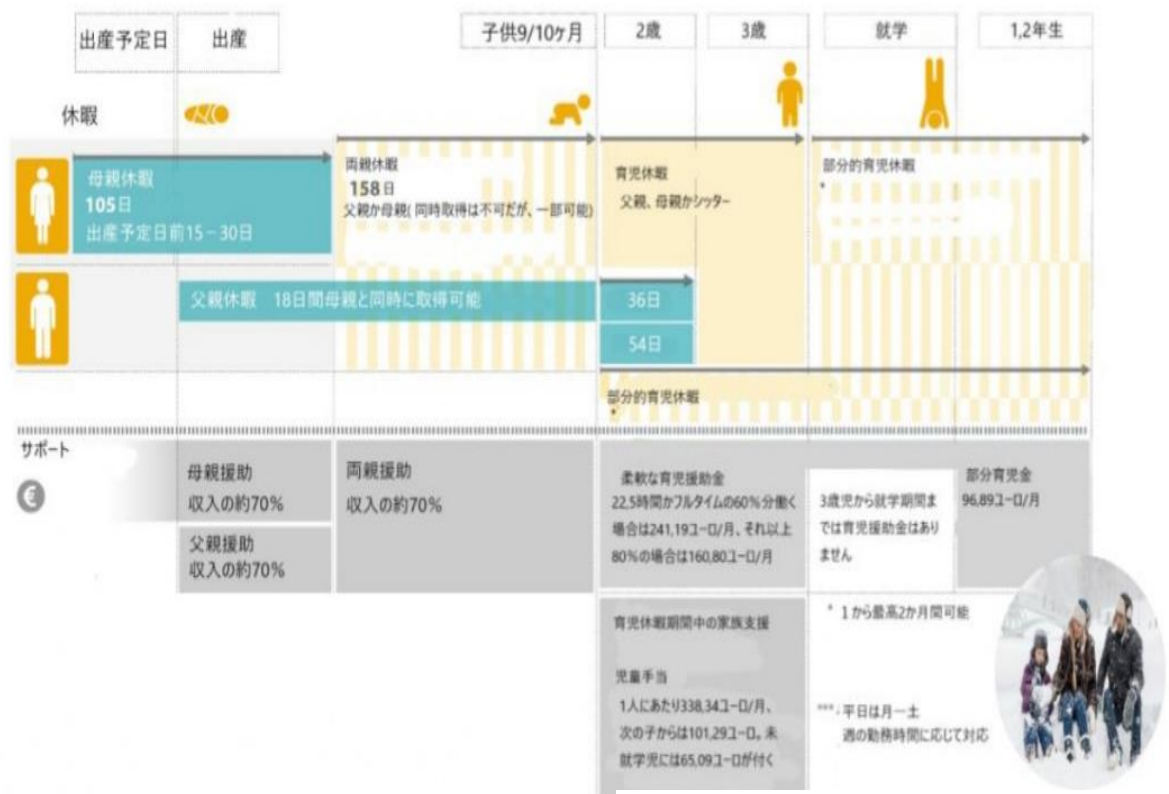
・“ネウボラ”とは、アドバイスの場という意味で、妊娠期から就学期までのこどもの健やかな成長、発達の支援にとどまらず、母親、父親、きょうだい家族全体の心身のサポートも目的としている。長崎市でいうところの子育て支援センターをイメージさせる。

・フィンランドでは出産予定日前 15 日～30 日を起点に産後 105 日までの産前産後休暇を取得できる。その後の両親の休暇は父母のどちらかが取得でき、父親休暇は、出産日から 10 カ月の期間に 18 日間母親と同時に取得できる。妊娠が判明した時点ですぐに前項であげた“ネウボラ”がサポートに入る。高学歴の女性が多く社会的地位の高い妊婦も少なくない。産後の職場復帰までは主に 10 カ月で、延長した育休中にスキルアップし、転職する女性もいる。ネウボラの支援が手厚く、親子はこもりきりにはならず、心身ともに元気な母子が多い。

・プライマリーケアとは、簡単に言うと、普段から何でも診てくれ、相談に乗ってくれる身近な医師による医療で、フィンランドでは病気になると緊急の場合を除いて、まず居住している地区にある健康センターに行く。そこで看護師による問診や、医師の診療、必要に応じて X 線検査などの初歩的な検査、リハビリを受ける。健康センターは、病気等の診療だけではなく、健康診断の結果についての相談から、予約なしのネウボラ支援など、全体としてファミリーセンター化している。

余談だが、地方自治体が健康センターで働く医師に給料を支払っており、二次、三次医療を担当する「総合病院（緊急時の医療含む）」の場合も、複数の地方自治体、また国からの補助によって、医師の給与が支払われ、出来高払いにより病院経営が潤うわけではないので、医師が過剰な治療をするインセンティブが働き難い。患者から過剰な医療費を取るよりも、医療水準を保ち地方政府に信頼を持たせることによって、住民が納得して高い税金を納めていると推測される。

PERHEVAPAAT JA KORVAUKSET



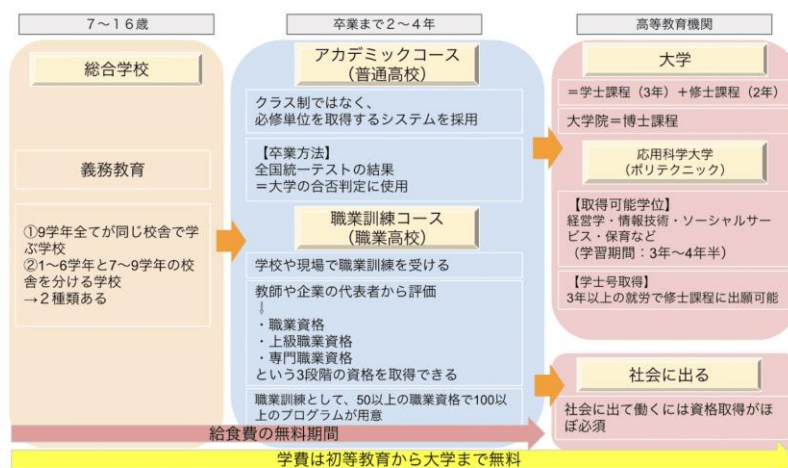
講師資料より: フィンランドの産前産後休暇



厚生労働省資料「働きながらお母さんになるあなたへ」より

《教育》

- ・フィンランドでは、幼少期から自分で選択し、自分の気持ちを発する場面が当たり前に身近にあり、主体的であることが常である。学習課題や進路についても見通しをもって取り組み、日本のように“周囲に流される”ことが少ない。自分の人生に主体的であることの象徴として、生涯学習にも意欲的である。働きながら学習し、離職率は高いが、大きな職種の鞍替えは無く、転職＝ステップアップであることがうかがえる。
- ・さらなる教育の平等や高スキル人材の実現のため、フィンランドの義務教育は2021年に18歳まで拡充された。



参考：フィンランド教育の特徴とは？サイトより

- ・不登校や高等学校の中途退学生徒の居場所として専門学校のフリースクールがあり、（TUVA）“居場所”であり“学校”である。教師は養護学校の教師の資格を持ち、なんでも屋のような役割。クラス編成は主担任2人、副担任2人、補助1人に対してこども17～20人。
- ・高等学校を卒業し、すぐに大学に進学するのではなく、それぞれ将来の見通しが決まり何を学びたいか決まった時点で大学に入学する。大学生の平均年齢が30才であることと、義務教育卒業年度に進学しない率が72%であることから、卒業＝進学ではないことが顕著である。一方、高等学校は日本でいう大学のような位置づけでゼミやクラスなど、自分で時間割を作り、自分の学びを深めていく。

フィンランドはもともと貧困国家だが、大学まで無償となることで、両親の財力に左右されずに学ぶことができる。日本で課題となっている教育格差が生まれない仕組みである。また、フィンランドでは現在、大きな貧富の差がなく、生涯を通して昔からの友人と大切に付き合っていくことができる。

- ・幼少期から何度も手にする成績表だが、その後のこどもたちのためには役立っていない。教科書の内容理解度以外に生きる術が書かれている

ような新しい成績表を目指している。履歴書のように、頑張っているところや伸びているところ、自身の強みを記載し、また、“より集中できる環境“から“ストレスがかかると甘いものを食べすぎるから、気づいたら悩みを聞いてあげてほしい”などの個別の内容まで記載する。

勉強のみの成績表だと、悪い評価の成績表を受け取り続けているこどももいるが、1つのネガティブな内容に対して3つのポジティブな内容を盛り込んでいき、成功体験を可視化する。自分だけで自分を理解することはできない。周囲のフィードバックをもらい理解していく。「わたしの取扱い書」として、生涯を通して活用するイメージ。

《仕事》

・ラヒホイタヤは1993年から運用されているフィンランド独自の資格制度。医療福祉の分野にまたがる基礎資格となっており、これを保有していれば介護・保育・看護の分野で幅広く活躍することができる。2年間学校に通い資格を取得することで、高齢者やこども、障がい者等、ケアを必要とするすべての人に関わることができる。ラヒホイタヤで入社すると「昇格」が無いが、就労後に再度自らの学びたい大学に通い、スキル向上や資格を取得して戻ることも可能。働いている人だけ対象の学習契約なるものがあり、学習のコースについての料金は国が払う。



- 自分で進んで行動出来る
- 批判的思考
- 2か国語以上が話せるのが理想的
- 自分の取扱書を持っている
- 多文化の環境に柔軟に対応出来る
- ITを使いこなすことが出来る
- 生涯学習に意欲的

フィンランド社会が求める人物像

講師資料より: フィンランド社会が求める人物像

《精神》

・「世界で最も幸せな国」として知られていながらも、実はうつ病が多い。自殺率からみても、フィンランドはEUの平均を超える自殺率を記録している。世界の自殺率ランキングでも10位に位置している。日照時間が短く、ビタミンDの接種量が少ないことも原因の一因であると言われている。また、寒い国であることから、体を温めるために強いアルコールを飲む習慣が根付いており、アルコール依存症になりやすい

背景ももっている。近年アルコール依存やマリファナ等は減少傾向にある。喫煙率が高い。通称ポップコーン肺（閉塞性細気管支炎）が多く、喘息気味な人が多い。確かに街中でも非常に多く喫煙者を見かけた。

研修視察考察

「わたしの取扱い書」というところがとても印象に残った。「自分のことを理解して、他人もあなたのことを理解して、お互いに自分らしくありながらも、一緒に何かをやり遂げるための補助アイテム」ということだった。「自分のことを理解する」ということは特に幼児教育でも大事な部分であると常々感じている。「自分はそのままの自分でいいのだ」と思える自己肯定感のためにも、こどもは身近な存在である親から愛されることが何よりも大切であり、自分のすべてを受け止めてもらうことで心の安定感を得て、自分に自信を持つ。親をはじめとするまわりの人に大切にされれば、こどもも親やまわりの人たちを大切にし、思いやる心が芽生えてくる。そこが土台となり、この土台なしに自己理解・他者理解はなしえないと思った。

また教育・福祉における国の考えに違いも感じた。フィンランドは税金が高いことでも有名だが、その分教育や福祉が充実している。使い道が明確に示され、効率的でシンプルな考え方が国民性とマッチしているのだとも思う。ラヒホイタヤのように医療や福祉の分野で働く人たちの給料や学びの場をきちんと保障するシステムがあれば、介護職が不足、福祉職が不足、等の問題も解決できるのではないか。

ジェンダーレスや女性の地位向上など、日本で長きにわたり取り上げられている課題についても、フィンランドは先進的である。まだまだ子育ては女性がするものという考え方がある日本は、いったいいつになったら保健センターに男性がいても当たり前になるのだろうか。育メンなどと軽い言葉でごまかしてないで、フィンランドのような国づくりをしていかなければ出生率も上がらないのではないかと思う。

フィンランドは「先進的」と表現したが、わざわざ議題に取り上げるまでもなく、当たり前になら男女差は無く、こどもの頃から主体的であることと無関係ではないと感じる。近頃日本で話題の夫婦別姓についても“選択性”であり、女性の地位の高さや生涯学習や転職に対して意欲的であることから、「自分で選ぶ」ことがごく普通であるということがうかがえる。

世界幸福度調査の指標の1つとして「人生における選択の自由度」というものがあり、フィンランドが「世界で最も幸せな国」であることは、言い換えれば「自分自身が自分の人生を選ぶことができる国」であると

言えるのではないか。日本のように学生⇒社会人のようにライフステージを区切るのではなく、変わり続け、選択し続けるものとして人生を捉えているフィンランドは、一旦立ち止まってじっくり考える時間を持つことも“選択肢”の中にある。年齢や学業成績のみで進む方向を決めるのではなく、自分自身が納得のいく選択を自分のペースで重ねていくことが重要であるという考えが浸透している。

みんなと同じが良いとするような風潮のある日本では、各ステージの区切りをなくした自由な意思決定は、難しくプレッシャーに感じる人もいるだろう。「選択性」の人生を歩むことは、急にはできない。やはり、幼少期からの自己理解・他者理解を経ての自己決定力を養うこと、そして国や行政をあげての教育システムの整備も見直しが必要だ。

講師の話聞いた後、近くの保健センターと高齢者のデイサービスセンターを見学させてもらった。



保健センター内



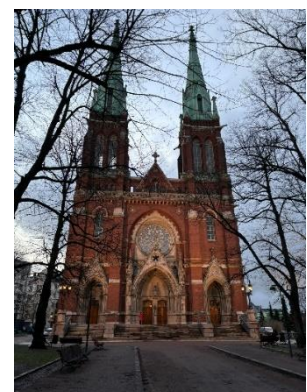
廊下にも工夫がされている

自由視察

●カッペリ（Koppeli）は 1840 年創業の歴史あるレストラン。現在の建物は 1867 年に建てられた。神殿風の入り口と大きなガラス張りのクラシックレストラン。エスプラナーディ公園の一角にある。

●デザイン博物館には 19 世紀後半から現代にいたるまでのフィンランドや各国の工業デザインと工芸品が収蔵されている。元学校だった建物を再利用し、モダンな空間へとよみがえらせた。

●聖ヨハネス教会はスウェーデン建築家アドルフ・メランダーによってゴシックリバイバル様式で設計されたルーテル教会。教会のシンボルである青緑のツインタワーは高さ 47m、教会内部は最大 2,600 人を収容でき、収容人数ではフィンランド最大規模の石造教会である。



聖ヨハネス教会

●カンピ礼拝堂は静寂の教会とも呼ばれ、都会の喧騒の中で誰もがいつでも静寂を享受できるようにというコンセプトのもと作られた。繁華街の中心に造られた木造建築の秀作。竣工前から斬新なデザインで注目を集め、2010年には国際的建築賞を受賞した。

【4日目 ヘルシンキ③】

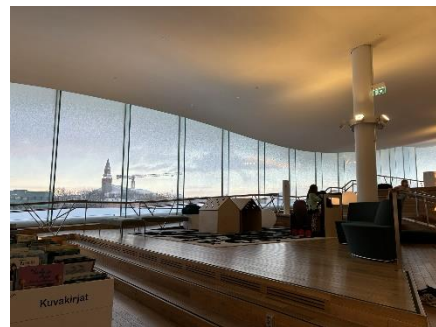
ヘルシンキ中央図書館、国会議事堂、自然史美術館、ヘルシンキ市立美術館

自由視察

●ヘルシンキ中央図書館オーディはフィンランド独立100周年のメインプロジェクトのひとつとしてALAアーキテクツによって設計された。「市民が集うリビングルーム」をコンセプトに100周年の翌年、そして独立記念日の前日である2018年12月5日にオープンした。1.7ヘクタールの敷地面積に建てられており、フィンランド湖の穏やかな波を彷彿とさせるようなガラス張りの上部と、フィンランドの森のぬくもりを感じさせるような滑らかな曲線をもつファサードからなる。フィンランド市内には37つの図書館があるが、先進性と象徴性はオーディが群を抜いている。1階にはインフォメーションカウンターやカフェ、映画館などが設置され、多様なクリエイションを行える2階、読書や学習ができて10万冊の蔵書が並ぶ「本の天国」の3階と、フロアごとに機能が明確に分担されている。フロアごとに完全に異なる雰囲気と機能をもち、それだけで共存し、誰もが創造性を発揮できる場となっている。



オーディ外観



3階にある「本の天国」

●国会議事堂は1931年に完成。建築様式はコリント式の柱が並ぶ新古典主義建築であるが、20世紀初頭のモダニズムの影響を受けており、装飾は簡略化されている。フィンランド議会は一院制で議員定数は200。

●自然史美術館は世界中のさまざまな動植物、地質、古生物、鉱物などの標本やサンプルが展示されている。1階は脊椎動物の骨が展示され、2階は北極からアフリカのサバンナ、南半球まで世界の自然や生命体につ

いて知ることができるフロア、3 階は季節ごとのフィンランドの自然について展示されている。さらに恐竜の全身骨格が展示されていたり、生物の発達、進化について展示されている。

●ヘルシンキ市立美術館ではトーベヤンソン展が開催されていた。彫刻家の父とグラフィックアーティストの母をもつ芸術一家の長女で、画家、小説家、ファンタジー作家でもあるトーベヤンソンはムーミンシリーズの作家として世界的に知られている。

【まとめ】

11 月 18 日よりスタートした令和 6 年度欧州専門調査は、市議会議員の 2 名、建設技術センターから 1 名、子育て支援係長 1 名と、様々な職種や組織の方との研修になりました。大人になり、初対面の方と 4 泊 6 日もの研修旅行。なかなか体験できない貴重なものになりました。気さくな方ばかりで、職種は違っても、日ごろの仕事に対する考えや思い等、多岐にわたる話ができ、非常に有意義な時間でした。

歴史を感じる石造りの建造物とモダン建築が融合する美しい街並み、世界幸福度ランキング 1 位 2 位の人々に触れ、コミュニティ意識の高さやその背景にある 1 人ひとりの考え方のスマートさ、それを支える社会保障の充実を学ぶことができました。この研修で学んだことは、これからの日本の国の指針になると感じました。103 万円の壁等税制が話題になっていますが、日本の社会は家族構成・働き方等変化して来ていて今までのルールでは対応できなくなっていると思います。また少子高齢化で社会保障も上がりこれからの問題となっています。研修では色々な事が勉強になり、これからの日本の社会が目指すべき所ではないかと考える様になりました。長崎市に於いても今まで通りではなく、社会に対応した施設を考えていこうと思います。勉強の機会を与えて頂きありがとうございました。



ストロイエ通り



宿泊したホテル前の風景